



ちひろ 本を読む人 描く人

●2025年9月5日(金)～11月9日(日)

主催：ちひろ美術館 後援：(公社)読書推進運動協議会、(一社)日本児童出版美術家連盟

本展では、ちひろの描いた本にまつわる作品や絵本、読んできた本を展示し、ちひろと本との関わりを紹介します。

ちひろの描く、本のある風景

ちひろの描いた作品のなかには本を読んだり、持っていたりする人の姿が少なくありません。育児書、童話集、雑誌の表紙、そしてスケッチ等その種類は多岐にわたりますが、そこには人と本とのつながりが愛情をもって描かれています。



図1 本を読む母と子、本を抱える男の子
『ね、おはなしよんで』(童心社)表紙 1962年

12年前に出版社より返却されて以来、初公開の作品は、大人が幼い子どもに読んで聞かせるための読みものを集めた『ね、おはなし読んで』(童心社)の表紙と裏表紙のために描かれたものです(図1)。表紙の絵では、本の手前とふたりの髪には花が飾られ、どこか夢のような愛らしさがただよっています。裏表紙では、少年が大きな本を抱えています。ちひろは、その2年前に童心社が初めて出版したハードカバーの絵本『あいうえおのほん』の絵も手がけており、その表紙にも、似たように本を抱える少年が描かれています(図2)。



図2 『あいうえおのほん』(童心社)表紙 部分 1960年

スケッチでも、本を読む人を多く描いています。ちひろは、敗戦の翌1946年、疎開先の信州から、絵を学ぶために上京します。神田の叔母の家の屋根裏に下宿し、日中は新聞社の記者として働きながら、夜は芸術学校に通いました。そのころに描かれたこのスケッチでは、ちひろはキャンバスやイーゼル、画材に囲まれ、床に座って本を読んでいます(図3)。同居していたいところによると、「畳がなく、板の間にうすべりをしただけの粗末な」部屋でした。当時ちひろは複数の美術団体に所属して、制作もしてい



図3 屋根裏のアトリエで本を読む自画像 1947年頃

ました。ペンで描かれた比較的小さなスケッチですが、これからの道を考えるようにも見え、なんの本を読んでいるのかと思わせます。

ちひろの読んできた本

では、ちひろはどのような本を読んできたのでしょうか。彼女は、幼いころの本の思い出についてこう記しています。「そのころ私は、ときどき垣根越しに隣のむすこと遊んでいた。ある日、垣根越しにその子が一冊の絵本を渡してくれた。厚手の紙に印刷された本であった。その本は今まで私が家で見ていた本とはまるで違っていった。美しい月見草が夕やみのなかにゆれてにっているようであった。」ここで語られているのは、大正時代を代表する、子どものための芸術的な絵雑誌のひとつ「コドモノクニ」です(図4)。続けて「私の心のなかには、



図4 岡本帰一 サンリン
シャ「コドモノクニ」
1926年

幼い日見た絵本の絵がまだ生きつづけている。」と語っており、ちひろが本のなかで出会った初山滋や、武井武雄らの絵は大きな意味をもち、後にとともに童画家として仕事をするようになったときの感慨が想像されます。

童心社の「若い人のための絵本」シリーズは、若い読者のために好きな文学作品を選び、それに自由に絵を描くことができるという企画で、ちひろは意欲的に取り組み、一作目のアンデルセンの『絵のない絵本』以降、全部で7冊を手がけました。『花の童話集』(1969年、童心社)は、宮沢賢治の童話のなかから、花や植物が登場する物語を選んだものです(図5)。ちひろは、戦時中に賢治の作品に接し、その世界に惹きこまれました。戦後も賢治の詩を繰り返し読み、^{そら}諷んじ、日記にも彼の詩を引用していました。それから30年近くして、初めて賢治の童話に絵を描く機会を得たちひろは、「私ふうに好きのように描いたので、それが私にはうれしくてなりませんでした。この本は私の大切な宮沢賢治です」と語っています。ちひろにとって、宮沢



図5 『花の童話集』(童心社)表紙 1969年

賢治の文や詩にあらわれる自然のなかの生命力は、自らの世界観に通じるものがあつたと思われます。

ちひろの描いた本

ちひろは、他の作家の物語や昔話に絵を描いていくうちに、自分にしかできない絵本を描きたいと思うようになります。「さざなみのような画風の流行に左右されず、何年も読みつづけられる絵本を、せつにかきたいと思う。もっとも個性的であることが、もっとも本当のものであるといわれるように、わたしは、すべて自分で考えたような絵本をつくりたいと思う。」と、1964年に記しています。

至光社の絵雑誌「こどものせかい」に1958年から絵を描いていたちひろは、1968年に欧米の絵本に刺激を受けて帰国したばかりの同社の編集者の武市八十雄に、いわれます。「岩崎さん！絵本でなければいけないことをしよう。画集でもなく、紙芝居を集めて綴じたものでもなく、物語に挿絵をつけたものでない絵本を！」武市のことばに共鳴したちひろは、勉強会をいっしょにしよう、と応じます。話し合うなかで、説明ではなく、「感じ、感じさせること」を大切にする絵本を目指します。1968年の『あめのひのおるすばん』から始まり、武市とのコンビでの3冊目となった絵本が『となりにきたこ』です。当初ちひろは鉛筆と墨のモノクロで描いていましたが(図6)、



図6 『となりにきたこ』習作 1970年

画材をパステルに変えたことにより、細かく繊細な描写が、勢いのある大胆な線で力強さを得、それまでにはない抽象性が画面に表れています(図7)。ちひろは、「描きはじめるまえにあれこれとえがいたイメージは、はかなく消えて、思いもかけない絵本ができました。」と語っており、新しい試みであったことがうかがえます。(松方路子)



図7 『となりにきたこ』(至光社)より 1970年

ヒロシマ トマト 司 修 展

●2025年9月5日(金)～11月9日(日)

主催：ちひろ美術館 後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、信濃毎日新聞社、市民タイムス、abn長野朝日放送、長野エフエム放送株式会社
協力：岩波書店、偕成社、県立神奈川近代文学館、群馬県立近代美術館、前橋文学館

私小説・夢百話

司修は17歳のころから独学で油絵を描き始め、1959年に23歳で上京してからは自由美術家協会展等へ出品し、個展も開催するなど、画家として歩み始めました。一方で、生活のために装丁や絵本の仕事も始めます。当初は純粋な画家から外れる恥ずかしさを抱えながらも、次第に物語を絵にする魅力にひかれていきました。装丁の仕事を通して大江健三郎や水上勉などの作家と出会い、自身も深い洞察や取材に基づいたエッセイや小説、評論などを手がけるようになります。司は、絵と文章の境のない自在な表現者であり、また常に自分のなかに表現したい、表現しなくてはならない、切実なものを抱え続けた人でもありました。



図1 火の車 『私小説・夢百話』(司修・文 岩波書店)より 2023年 個人蔵

司は岩波書店の月刊誌「図書」の2017年から2021年までの5年間、毎号表紙絵を描き、その表紙の裏に「夢」に関するエッセイを書きました。それらの作品にさらに追加して100点をまとめた本が、2023年に出版された『私小説・夢百話』(岩波書店)です。幻想的な絵とともに、出会った人々のこと、美術や文学のこと、旅した土地のこと、社会問題などのさまざまな話が、夢と記憶、現実が交錯しながら書かれています。なかでも戦中・戦後の少年時代の記憶は、繰り返し語られています。

1936年に群馬県前橋市で生まれた司は、9歳で前橋空襲を体験し、焼け野原となった町で敗戦を迎えました。戦争で受ける傷は、肉体のものではありません。司は子どものときに受けた傷を忘れることなく、創作の源としてきました。

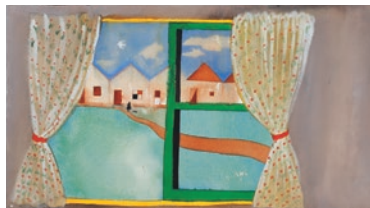
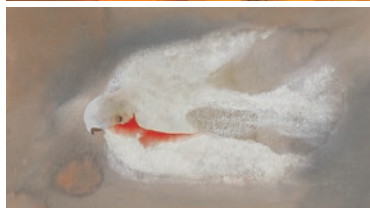
広島原爆

本展の核となる『まちゃんと』(松谷みよ子・文 偕成社)は、1945年8月6日の朝、広島で被爆してトマトをねだりながら亡くなった3歳の女の子を主人公にした絵本です。幼い子も目にする絵本に原爆を描くにあたり、司は自分が思うような恐ろしい原爆の図を描くわけにはいかないと考え、1年以上悩み続けたといいます。目をそむけたくなる場面もモノクロームなら救われるのではと、黒一色のリトグラフで1冊分を描き上げます

が、その後また1年かかって全場面を鮮やかな色彩の絵に描き直しました。

今年6月、司はちひろ美術館・東京での「ヒロシマ トマト」と題した講演で、この絵本を手がけたときからの思いを語りました。そのなかで何度も読み返してきたという『詩集 原子雲の下より』(青木文庫)に収録された、広島の子どもの詩や絵、原爆に向き合ってきた人たちのことば、現地での取材などから、司は深く広島原爆のイメージを探り出し、自分のなかに取り込み、表現していったことがわかります。原爆病院院長の重藤文夫氏が語った、被爆直後の翼を傷めた小鳥の死の話から、亡くなった女の子が鳥になる場面を思い浮かべ(図3)、「ヒロシマの空を、世界中の空を飛ぶために生きる、死と再生のイメージ」*1を持ったといいます。初版から5年後に、すべての場面に手を加えて出版された改訂版では、白い鳥が現代の空を飛ぶ場面(図4)が新たに描き足され、広島原爆は過去ではなく、今につながっていることがより強調されました。

長年にわたって取り組んだ絵本『まちゃんと』以後もずっと、司は原爆や核の問題に向き合い続け、絵画や脚本、小説など、さまざまな表現の仕方で私たちに提示し続けています。



上図2/中図3/下図4 『まちゃんと』(松谷みよ子・文 偕成社) 1978年/1983年 ちひろ美術館蔵

宮沢賢治の童話

1969年に『宮沢賢治童話集』(実業之日本社)のための絵を依頼されたのをきっかけに、司は宮沢賢治の生き方や作品に魅せられていきます。「注文の多い料



図5 『雁の童子』(宮沢賢治・作、偕成社)より 2004年 個人蔵

理店」や「雁の童子」(図5)などの童話を繰り返し描き、そのたびに異なる画材や技法を用いて新たな表現を見せてきました。それは「賢治の物語に塗り込められた、絵の具の層から滲み出てくる変化」*2だといいます。イーハトーブのモチーフとなった賢治の故郷・岩手県も繰り返し訪れ、賢治の人物像や世界観のイメージを膨らませ、絵物語や小説にもしてきました。

2011年3月11日、東日本大震災とそれに続く福島第一原発の事故が東北地方を襲いました。司は自分にもなにかできることがないかと思い続け、賢治の『グスコブドリの伝記』『雨ニモマケズ』、そして『銀河鉄道の夜』(偕成社 図6)



図6 『(絵本) 銀河鉄道の夜』(宮沢賢治・作 偕成社)より 2014年 個人蔵

を絵本に描きました。物語の終盤、銀河の旅を続けてきたジョバンニとカムパネルラが、どこまでもふたりで皆のほんとうのしあわせを探しに行こうと約束した直後、カムパネルラの姿が消え、目覚めたジョバンニは友人の死を知ります。「新たに『銀河鉄道の夜』を読むことで、多くの死者と、生き延びた人々の苦しみ、苦しみを乗り越えて生きるもうひとつの苦しみと希望を、知る機会になるのではないかと、司はこの絵本のあとがきに記しています。

「過去のことは忘れて未来を語らねば、という人たちが増えている。たしかに人間には未来が大切である。が、忘れてはならないものがある。それなしでの未来など虚像にすぎない」*3。目まぐるしく変化していく社会のなかで、忘れてはいけないものを見極めながら、89歳になる今も新しい表現を模索し続けている、司修の世界をご覧ください。(上島史子)

*1 「ヒロシマ・トマト」 月刊「図書」2025年7月号(岩波書店)より *2 『さようなら大江健三郎こんにちは』(鳥影社)より 2024年

*3 『夢の中の遠い声』(法蔵館)より 1993年

ちひろ美術館コレクション 生誕220年 アンデルセンの絵本 2025年9月5日（金）～11月9日（日）

2025年はデンマークの童話作家、ハンス・クリスチャン・アンデルセンの生誕220年にあたります。これを機会として、ちひろ美術館コレクションのなかから、世界の絵本画家がアンデルセンの物語を描いた作品を紹介します。



図1 ヤナ・キセロヴァー＝シテコヴァー（スロヴァキア）『おやゆびひめ』より 2001年

ヤナ・キセロヴァー＝シテコヴァーは作品制作の際、紙ではなく目の荒い“麻布”にテンペラやインクで細密に描くと

いう手法を用いています。『おやゆびひめ』（図1）も、船を漕ぐおやゆびひめの姿や小花が、細かなところまで描かれています。このほかに「人魚姫」や「みにくいあひるのこ」「雪の女王」など、さまざまな物語の登場人物が描かれた「H. C. アンデルセンにささげるI」などの作品も展示します。

『白鳥の王子』は昼の間白鳥の姿になる魔法をかけられた11人の王子を、妹の王女が救う冒険の物語です。カーリナ・カイラは不安のなかで他国へと旅立つ白



図2 カーリナ・カイラ（フィンランド）『白鳥の王子』より 1990年

鳥と王女を、やわらかな光で包むように描いています。（図2）



図3 クヴィエタ・パツォウスカー（チェコ）『すずの兵隊』より 1985年

クヴィエタ・パツォウスカーは、絵本を「立体的な造形物」ととらえ、独自の制作活動を行った画家です。1992年に国際アンデルセン賞画家賞を受賞しています。リトグラフによる限定本の『すずの兵隊』（図3）でも、自由な形や鮮やかな色彩で物語の世界をつくり出しています。（矢野ゆう子）

●活動報告

「戦後80年 ちひろと世界の絵本画家たち 絵本でつなぐ『へいわ』」展示関連企画 映画「窓ぎわのトットちゃん」上映会 ～ 八鍬新之介監督が語る制作秘話 ～ 2025年5月9日（金）・5月10日（土）

会場：松川村立松川中学校、松川村・すずの音ホール 共催：松川村図書館

春の展覧会「戦後80年 ちひろと世界の絵本画家たち 絵本でつなぐ『へいわ』」展では、黒柳徹子（ちひろ美術館館長）がトモエ学園での思い出をつづった自叙伝『窓ぎわのトットちゃん』と『続窓ぎわのトットちゃん』（講談社）をちひろの絵とともに紹介しました。その一環として、2023年公開のアニメーション映画「窓ぎわのトットちゃん」上映会と八鍬新之介監督によるトークイベントを松川村図書館と共同で開催しました。2日間の活動を報告します。（船本裕子）

5月9日（金）松川中学校・上映会

松川中学校の体育館の上映会には、全校生徒と教職員、松川小学校の5・6年生も加わり、総勢450名で映画を鑑賞しました。アニメーションで表現豊かに描かれたトットちゃんとクラスメートのいきいきとした姿に、一瞬でひきこまれた子どもたちは、笑ったり、涙したりとトットちゃんの姿に自身を投影しながら、真剣な表情で、スクリーンを見つめていました。

上映終了後の交流会では、八鍬監督が、中学生の感想や質問のひとつひとつに、丁寧に答えていました。

中学生からは、たくさんの感想が寄せられました。「とてもあたたかい気持ちになり、そして平和とは何かについて考えさせられました。印象に残ったシーンは、いよいよ第二次世界大戦が始まると

お弁当も貧相なものになったり、いつも挨拶してくれる駅員さんが戦場に行ってしまったら、戦争のせいで、いろいろなものが変わっていく描写がとても心苦しくなりました。トットちゃんはそんな中でも、いつも前向きで、その姿から元気がもらえる作品でもあります。」「戦争の愚かさを改めて実感しました。戦争はいのちも家も大切な人も、何もかもを奪う争いであり、あってはならないことだと思いました。今も世界各地で起きている紛争がどれだけ苦しいのか分かりました。」

5月10日（土）すずの音ホール・上映会

翌日には、松川村のすずの音ホールにて、上映会を行いました。

上映会終了後には、松本猛が聞き手となり、八鍬監督に、制作秘話や作品に込めた思いをうかがいました。

～八鍬監督が今、伝えたい思い～

「子どもにも大人にも共通していえるのは、思いやりの大切さです。最近の報道、SNSは、対立を煽っているような印象を受けます。人種や宗教を一括りにして、本来であれば、個人個人、まったく思想に差があるはずなのに、それをグループでカテゴライズして、ラベルを乱暴に貼りつける。それを受け止める側も深く知ろうとせずに信じてしまう。操作されている情報に騙されないで、自分の

近くにいる人を見て、遠くにいる人でも想像力を使って、自分たちと同じように、友だちになれる。そういった距離感で世界を見てほしい。映画を観た後に、自分が生きている社会に目を向けてほしいと思います。」



松川中学生との交流会（松川中学校）



トークイベント 聞き手：松本猛（すずの音ホール）



©黒柳徹子/2023映画「窓ぎわのトットちゃん」製作委員会

ひとこと ふたこと みこと



5月26日（月）

福島県から来ました。ちひろの絵はいつ見てもいいですね。（中略）世界が平和でありますようにとの思いが、ひしひしと伝わってきます。明日からまた、前向きに生きていきたいと思いました。東日本大震災で家は流されてしまったけれど、悲しかったけれど後ろを見たって仕方ない。前を向いて頑張っていきたい。 Tsuyoshi

5月27日（火）

私はとくにクレヨンでかかれた絵がお気に入りです。私もクレヨンで絵をかきくなりました。

5月27日（火）

亡くなった母がいつか来たいと話していたこの美術館にひとりで訪れています。でも、写真だけ持ってきました。連れてきてあげな

った後悔もありますが、ちひろさんの絵の中のお母さんを見て、いっしょに過ごした幸せな時間を思い出出すことができました。

6月8日（日）

小さいときに見ていた本と再会。昔とはまた別の見方（色彩のバランス）で楽しむことができました。芸術に触れるってやっぱりいいですね。 松本22歳

6月23日（月）

人は、ついつい固定観念に囚われますが、空が何色だってよくて、夕日が何色でもいい。自分の見える色を大切にすることを頑張りたい。

7月3日（木）

70才すぎてやっと来ました。小学校の教科書の挿し絵をみたく、なんとあたたかい絵かと感激した

のが、昨日のようです。画材に触れると飛び出す音と絵、本当に楽しい美術館ですね！ 栃木県 FM RM

7月10日（木）

ちひろさんの表現と説明に、自分独自の想像もたくさんふくらむ空間でした！

7月10日（木）

ここにきて長新太さんの『くもの日記ちょう』に出会えて楽しくなりました。子どもに読んであげたい。くもの見方が楽しいものになったよ～ Salt

7月21日（月）

びじゅつかんにきてよかった。（中略）わたしは、ちひろさんのえはほっこりしていてすきです。いつかわたしも、そうゆうえを、かきたいです。

美術館 日記



5月1日（木）☁/☂

長野県木曽青峰高等学校の平和学習の一環として、4クラスの生徒約80名にオンライン授業を行う。ちひろの人生や作品に戦争体験が与えた影響や、展示中の平和の絵本の紹介をしながら「絵本でつなぐ『へいわ』展」をスライドレクチャーした。オンライン授業は初の取り組みだったが「質の高い学習だった」「ほかの職員からも大好評でした」とうれしい声が届く。

5月18日（日）☀/☁



ちひろが愛した安曇野・まつかわ北アルプスパノラマウォークを開催（主催：松川村観光協会）。水

田に北アルプス連峰が映り込む水鏡の絶景を見ながら、地元ガイドのもと、約50人が元気に歩いた。うすの 鉦女神社では、安曇野の田園風景や人々の生活を唄と踊りによって表現した安曇節が披露され、村民のおもてなしに笑顔があふれる。

6月1日（日）☀

「青空トモエ学園 田んぼの教室2025」が始まった。30名の参加者は裸足で田んぼに入ると「気持ちいい!!」「カエルがいるよ」とにぎやか。アメンボやヤゴなどの生き物に触れながら、手植えを楽しむ。

6月28日（土）☀

安曇野ちひろ公園のおでかけホリデーにやぎ2頭が来園。「ちひろのひとり息子が松川村の祖父母に預けられたとき、やぎの乳を飲んでいたんですよ」と説明を受けると、参加者は乳しぼりに挑戦。じっと

していられないやぎに、子どもたちは公園の草を取ってあげたり、「かわいいね」となでたりしながら搾乳。初めは怖がっていた子も、愛嬌があり、人懐っこいやぎに「次はいつ来るの?」と目を輝かせた。



7月5日（土）☀/☁

展示関連イベントとして、「チョウ、シンタだらけの絵本のじかん」を開催。『キャベツくん』の大型絵本をめくると、ナンセンスな展開にくすっと笑いがおきる。手あそびでは「落ーちた落ちた♪キャベツくんが落ちた♪」などと歌い、大いに盛り上がった。

新収蔵 作品介绍⑪

いわさきちひろ
「よいこの クリスマス」
1959年

昨年、至光社より返却された絵雑誌「こどものせかい」の原画32点のなかから、2026年ちひろカレンダーの11月・12月を飾る「よいこのクリスマス」を紹介します。

この作品は、1959年12月号に、「おみすまして きいてごらん、どこかで やさしいかねがなる……」（詩・青木ハル子）と始まる、イエス・キリストの生誕を祝福する詩とともに掲載されました。冬の装いをした少女の背景に、聖夜に鳴る鐘や花を集める天使などが描かれています。

ちひろの画業のなかでも初期の仕事であるこの絵では、詩に登場するモチーフを選んで画面を構成し、ひとつひとつ丁寧に描写して

います。少女がかぶる縞模様の毛糸帽の紫と、鐘の明るいグレーの部分には、水彩絵の具の上にパステルを重ね、複雑な色合いをつくり出しています。画材や技法に工夫を凝らし、自らの表現を模索していたことがうかがえます。

ちひろカレンダーは、原画に近い色を再現するために、制作段階で複数回、原画と校正紙を並べて色校正を行っています。2026年版に収録されている7点の絵のうち、本作品と3月・4月の「きょうも たのしい ようちえん」の2点が新収蔵作品です。（穴倉恵美子）



「よいこの クリスマス」 絵雑誌「こどものせかい」1959年12月号（至光社）より 1959年

安曇野ちひろ美術館 イベント予定 各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。

下記イベントおよび展覧会の会期は予告なく変更になる可能性があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください、お電話にてお問合せ下さい。

TEL.0261-62-0772 chihiro.jp



〈展覧会関連イベント〉

●司 修 講演会 「ヒロシマとトマト」

○日時：10月4日（土）14：00～15：30

○定員：50名

○参加費：1000円（入館料別）

○講師：司 修

○申し込み：要事前予約（9月5日（金）

より公式サイト／TEL.にて）

戦争や原爆をさまざまな形で表現し続けてきた司修が、スライドを使って自身の思いを伝えます。



撮影：中島美江子

●ちひろの水彩技法ワークショップ にじみのしおりづくり



日時：9月28日（日）第一部：13：00～14：00

第二部：15：00～16：00

○会場：安曇野ちひろ美術館 子どもの展示室

○定員：各回12名 ○参加費：500円（入館料別）

○申し込み：要事前予約

（公式サイト／TEL.にて）

いわさきちひろが得意としていた水彩技法の「にじみ」を体験し、好きな部分を切り抜いて、しおりと缶バッジをつくります。

●松本 猛 講演会

「絵本とは何かー起源から表現の可能性まで」

共催：松川村図書館

○日時：11月3日（月・祝）

13：30～15：00

○会場：安曇野ちひろ美術館

絵本の部屋／オンライン

○定員：会場50名

オンライン100名

○参加費：会場 500円（入館料別）

／オンライン 500円

○講師：松本 猛

○申し込み：要事前予約

（9月5日（金）より公式サイト／TEL.にて）

いわさきちひろのひとり息子であり、当館の常任顧問をつとめる松本猛が、新刊『絵本とは何かー起源から表現の可能性まで』（岩波書店）の内容を中心に、講演会を行います。



●ギャラリートーク

○日時：9月20日（土）10月18日（土）11月2日（日）

14：00～ちひろ展 14：30～司修展

○参加費：無料（入館料別） ○定員：20名 ○申し込み：不要

開催中の展覧会の見どころを学芸員がわかりやすく解説します。

●館外でのいわさきちひろ展（ピエゾグラフ展）

○ピエゾグラフによる いわさきちひろ展 —窓ぎわのトットちゃん—

主催：MIZKAN MUSEUM、ちひろ美術館

期間：9月13日（土）～10月26日（日） 入場料：無料（事前予約不要）

場所：MIZKAN MUSEUM 内 MIM ホール（愛知県半田市）

TEL. 0569-24-5111

〈会期中のイベント〉

●インドネシアの絵本画家 イベ・マルフ 再発見

○日時：9月6日（土）14：00～15：30

○定員：30名 ○参加費：無料（入館料別）※オンライン配信予定

○講師：リアマ・マスラン・シホンビン（バンドン工科大学准教授）

エヴェリン・ゴザリ（絵本画家・デザイナー）

○申し込み：要事前予約（8月6日（水）より公式サイト／TEL.にて）

イベ・マルフ（1938～）は、インドネシアの「スケッチの王様」として知られ、1960年代からインドネシアの子どもの本の画家として活躍しました。彼の功績と文化保存をチームで調査している、バンドン工科大学のリアマ准教授によるトーク、彼が絵を手がけた詩のインドネシア語での朗読や、インドネシアの絵本の現在についての紹介などを行います（通訳あり）。

●あかちゃんとおでかけしよう！ ファーストミュージアムデー

○日時：11月8日（土）

10：00～11：00

○参加費：無料（入館料別）

○定員：10組

○対象：0～2歳児と保護者

○申し込み：要事前予約

（公式サイト／TEL.にて）

あかちゃん絵本の読み聞かせや展覧会のギャラリートークを楽しみましょう。



いわさきちひろ
りんごと天使 1964年

●絵本のじかん

○日時：9月6日（土）・10月4日（土）・11月1日（土）

11：30～12：00

○参加費：無料（入館料別）

○定員：20名 ○申し込み：不要

絵本の読み聞かせを行います。

あかちゃんから大人まで、どなたでもご参加いただけます。

●敬老の日

○日時：9月15日（月・祝） 10：00～17：00

65歳以上の方は入館料が無料になります。

受付にてお申し出ください。

●ちいさなおはなしの会 at 絵本カフェ

○日時：9月23日（火・祝）11：00～

○参加費：無料（入館料別）

○定員：20名 ○申し込み：不要

絵本カフェにて絵本の読み聞かせを楽しみましょう。

●長野県民感謝デー

○日時：11月9日（日） 10：00～17：00

長野県にお住まいの方は、入館が無料になる感謝デーを開催します。

※受付でご住所のわかるものを提示ください。

●開館情報

2025年11月10日～2026年2月28日は冬期休館となります。

CONTENTS 〈展示紹介〉ちひろ 本を読む人 描く人…②／ヒロシマとトマト 司修展…③ ちひろ美術館コレクション 生誕220年 アンデルセンの絵本…④ 〈活動報告〉映画「窓ぎわのトットちゃん」上映会～八鍬新之介監督が語る制作秘話～…④ ひとことふたことみこと／美術館日記／新収蔵作品紹介…⑤

美術館だより NO.118 発行 2025年8月22日



安曇野ちひろ美術館